

自伝的記憶の機能と想起特性

佐藤 浩一

群馬大学教育学部学校教育講座教育心理学教室

(2006年9月13日受理)

Functions and phenomenal characteristics of autobiographical memory remembering.

Koichi SATO

Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted September 13, 2006)

I 問題

1. 自伝的記憶の機能

人が人生において経験した出来事の記憶は「自伝的記憶」と呼ばれる。自伝的記憶については1970年代から検討が進められているが、近年になって、その機能に関する検討が盛んになってきている。その一つの成果として、専門誌“Memory”は2003年に「自伝的記憶—日常生活における機能」と題する特集を組んだ。この特集の企画にあたってBluck(2003)は、これまでの自伝的記憶研究が“*how much we remember*”, “*how well we remember*”に重点を置いていたことを指摘し、これに対し、“*why and how humans remember both mundane and significant life events*”を探究することを提言している(下線筆者)。

(1) 三つの機能

これまでの検討により、自伝的記憶が担う機能は大きく三つに分けられることが指摘されている。自己(self)、社会(social)、指示(directive)の三つである(Bluck, 2003)。「自己」機能とは、自伝的記憶が自己の連続性や一貫性を支えたり、望ましい自己像を維持するのに役立つという面を指す。また、過去と現在を対比させることで成長を実感するのに役立つという面もあるだろう。「社会」機能とは、自伝的記憶が対人関係の形成や維持に役立つという面を指す。また会話の中に自己の経験を挿入することで話の信憑性を高めたり、コミュニケーションを豊かにするということもある。「指示」機能とは、自伝的記憶が様々な判断や行動を方向づけるのに役立つという面を指す。人は現在の問題と類似した過去経験を想起することで、問題解決やプランニングに役立たせることがある。

また過去経験が人を動機づけたり、態度形成に寄与するということもある。

(2) 教師にまつわる記憶とその機能

佐藤(2000)は教員養成系大学の学生を対象に、小学校から高校までの教師にまつわる自伝的記憶を収集した。そしてその内容と、本人がどの程度教師という職業を志望しているかということとの関連を調べ、自伝的記憶の自己機能・指示機能の検討を試みた。その結果、教職志望の強い学生は弱い学生に比べると、教師にまつわる不快な記憶が少ないことが見出され、肯定的な記憶の蓄積が教職へと方向づける指示機能を果たしている可能性が指摘された。また、想起された出来事から影響を受けたかを問うたところ、教職志望の強い学生は影響を受けたと認識している率が高かった。影響の内容を分析したところ、教職志望の強い学生では、「教師になりたいと思ったきっかけ」や、「教師の行動をモデルとして認識した」という出来事が多く想起された(例：もともと理科が好きだったが、小5の夏休みの宿題で行った理科研究を夏休み後に先生と考えながら何日間も放課後まで研究を続けた。県で最優秀賞をいただいた。先生に憧れる気持ちはあったが、これ以降は私も理科の楽しさを教えられるようになりたいと思うようになった)。一方、教職志望の弱い学生では、「教師という対象に否定的な見方をするようになった」という想起が多かった(例：中2の体育の先生からは保健体育のテストで字や絵が下手で何が書いてあるのかわからないと言われ、60点くらいの点数しかとれなかった。とてもショックで何を言っても聞いてもらえず泣いた。あの先生たちと絶対に同じ職業に就きたくないと思った)。

職業選択は青年期のアイデンティティ形成にとって中核的な問題であり、例えば自我同一性地位を測定する Marcia パラダイムにおいても、イデオロギーと職業が二つの重要な領域として扱われている(Marcia, 1966)。従って、教職への動機づけに関わる記憶は、自己機能を有していると言える。また当時の出来事と現在の職業選択との一貫性・連続性の認識を支えるという意味でも、これらの記憶は自己機能を担っていると言える。こうした記憶はさらに、実際の職業選択を方向づけたり、あるいは教職に就いた場合には望ましい教師像としての判断の拠り所となり得るという意味で、指示機能を有していると考えられる。

また教職志望の程度にかかわらず、「学習・行動・性格が肯定的な方向に変化した」(例：小6の担任は「自主性」という言葉をクラスの目標に掲げ、発言するときにはせよ何にせよ、徹底的に私たちに身につけさせた。自主的に行動することが今できるのはこの先生のおかげ)、「態度や考え方への影響を受けた」(例：小4のとき6年生を送る会で「走れメロス」の劇をやることになり、担任が歌を全て作曲したりして皆で成功させた。皆で協力することの大切さを知った)という影響も多く報告された。これらの記憶も、現在の自己の出発点として認識され、過去から現在までの一貫性の感覚を与えてくれるという意味で、自己機能を有すると言える。さらに当時の出来事を想起することで現在の行動や判断を方向づけるのに役立つことも考えられる。

2. 出来事か？記憶か？

佐藤（2000）が収集した記憶の例をもう一度見てみよう。

もともと理科が好きだったが、小5の夏休みの宿題で行った理科研究を夏休み後に先生と考えながら何日間も放課後まで研究を続けた。県で最優秀賞をいただいた。先生に憧れる気持ちはあったが、これ以降は私も理科の楽しさを教えられるようになりたいと思うようになった。

この学生が教職を志望しているのは、当時指導してくれた教師の影響であろうか、それとも、この記憶を想起することが、本人を教職へと動機づける原動力になっているのだろうか。「その出来事の記憶が想起され、自己の基盤になったり判断を方向づけている」と考えれば、記憶が自己機能や指示機能を有していると言える。しかしその一方で、「その出来事が自己形成に寄与し判断を方向づけた」と解釈することも可能なのである。自伝的記憶の研究においては、出来事そのものではなく、あくまでも記憶が様々な機能を担っていることを明らかにしなければならない。そうでなければ、「小5の夏の出来事的那个人を教職へ動機づけた」というだけのことであり、出来事と職業選択を結ぶものとして「自伝的記憶」を位置づける必要はなくなってしまふ。そこで、本人にとって重要な意味を有し様々な機能を担う出来事は、その内容が特殊であるだけでなく、記憶としても特殊性を有しているということを確認しなければならない。

このことは実は、先に紹介した佐藤（2000）に限られる問題ではない。これまでの研究では、こうした機能を担う自伝的記憶が、記憶としてどのような特性を有しているかという検討が不十分だったのである。この点を、自伝的記憶の自己機能に関わる McAdams や Singer たちの研究、そして指示機能を強調する Pillemer の研究を例に説明しよう。

(1) 社会的動機と自伝的記憶

自伝的記憶が自己の基盤になっている一すなわち自己機能を有している一ことを示唆する知見として、様々な社会的動機の個人差と自伝的記憶の想起内容の間に関連があるという結果があげられる。例えば個人的な強さを志向する動機（「力」動機）が強い人は、自分の心理的・身体的な力を感じた経験や、他者に影響を与えたり支配した経験を多く想起する。一方、他者との親密な関係を求める動機（「親密さ」動機）が強い人は、親密なコミュニケーション等を多く想起する（McAdams, 1982; Woike, Gershkovich, Piorkowski, & Polo, 1999）。

McAdams らは、次の世代を世話したり何かを伝えることに対する関心を測定する尺度（生殖性尺度）を作成した。また、生殖性に関わる行動のチェックリスト（誰かにスキルを教えた、コミュニティの集会に参加した、等）を作成し、さらに自伝的記憶にどのくらい「生殖性」のテーマ（何かを他者に与えた、後に何かを残した、等）が含まれているか分析した。その結果、生殖性尺度と行動と自伝的記憶の間に強い相関が認められた（McAdams & Aubin, 1992; McAdams, Aubin, & Logan, 1993）。すなわち、生殖性の強い人は、実生活でもそうした行動を実行しているし、自伝的記憶にもそうした内容が多く含まれているのである。

しかしながら、力・親密さ・生殖性のいずれの動機についても、動機—経験—記憶の間の因果関

係は不明確である。自分の行為を想起することがその後の行動を方向づけるのであれば、自伝的記憶が自己や動機を支える基盤として機能していると言えるだろう。しかし、ある動機を強く持っている人が、それに合致した行動をとっているというだけであり、記憶は経験の副産物に過ぎないという可能性もあり得る。

(2) Singer らの自己定義記憶

自伝的記憶の中には、その人のアイデンティティと密接に結びついていて、強い感情を伴って鮮明に想起されるものがある。このように「私」を象徴する記憶を Singer & Salovey (1993) は「自己定義記憶 (self-defining memory)」と呼んだ。これは文字通り、「自分はいったい誰なのか?」という問いかけに答を与えてくれる記憶である。自己定義記憶の研究では、参加者に対して次のような説明が与えられる。

少なくとも1年以上前の出来事で、あなたにとって馴染み深く明瞭で重要で (*very familiar, clear, and important*), 何度も思い出されたり, そのことについて考えたような記憶。自己理解に役立ち, 例えば友達にそのことを話すとする重要な情報をはっきりと伝えるような記憶 (*the type of memory told to a friend to convey important information powerfully*). 強い感情を伴うが, それはポジティブな感情であることも, ネガティブな感情であることも, また両者が混ざっていることもある。 (Moffitt & Singer, 1994, p.26)

そして例えば次のような記憶が報告される。

夕食の間中, 父との別れが迫っていることを考えて涙が流れそうだった。父は私を残して行き, 3ヶ月は会えないだろう……自分はひとりぼっちになるんだという感覚に強く襲われ, これからどうなるだろうと思ったことが思い出される。 (McLean & Thorne, 2003, p.638)

自己定義記憶は「繰り返し想起される」「強い感情を伴う」「鮮明に想起される」「他の記憶と結びついている」という特性を有するとされている (Singer & Blagov, 2004)。しかしこれらは臨床場面でのクライアントの語りから引き出された特性であったり (Singer & Blagov, 2004), 自己定義記憶について評定を求めた結果から主張されていることに過ぎない。例えば Moffitt & Singer (1994) は10の自己定義記憶を想起するよう参加者に求め, 想起された記憶の重要度と鮮明度を0-6の7段階で評定させ, 重要度は平均4.35 ($SD=0.71$), 鮮明度は平均4.74 ($SD=0.77$) と高い評定が得られたことを報告している。しかし自己定義的でない記憶との比較が行われているわけではない。また大学生を対象に自己定義記憶を検討した McLean (2005) は, 収集された自己定義記憶の90%がこれまで, 「自分のことを説明する」「聴き手を楽しませる」など様々な目的のために, 他者に対して語られていたことを見出している。しかしここでも, 自己定義記憶とそれ以外の記憶が比較されているわけではない。自伝的記憶が社会機能を有することからも推測されるように, 記憶を人に語ること自体は日常生活で珍しいことではないし (Hyman & Faries, 1992; Marsh & Tversky, 2004), 語られる記憶が全て自己定義的であるわけでもない。自己定義記憶が象徴する経験が本人にとって特別に重要であることは認めるにしても, 他の記憶と比較して, 自己定義記憶の記憶としての独自性が検証されているとは言えないのである。

(3) Pillemer の個人的出来事記憶

Pillemer (1998, 2001) はスキーマやスクリプトのように抽象的な知識構造が人を方向づけるという認知心理学の発想に異議を唱え、一回だけの出来事の記憶であっても強力な機能を発揮することを強調し、特定の時間と場所において生じた、特定の出来事の記憶を「個人的出来事記憶 (personal event memory)」と名づけた。そしてその内容分析から、「出発点」「ターニングポイント」「アンカー」「類推」という 4 つの指示機能を提唱した。次にあげるのは「ターニングポイント」の一例である。

大学 2 年生のときに英文学のコースをとりました。私はそこで論ぜられる作品が好きで、レポートも楽しんで書いていました。でもある詩についての解釈を書いたときです。私自身はすごくひらめいたレポートだと思っていたのですが、レポートを返すときに先生は、私とその詩を全く理解しておらず、英文学を専攻して欲しくないと思うとまで言われたのです。このときの先生の厳しい顔や、きゅっと引き締まった口元を思い出します。こんな人にはなりたくないわ。そう思って専攻を英文学から社会学に変えたのです。(Pillemer, 1998, p.78)

Pillemer によると、出発点やターニングポイントとなった出来事は「長期的な目標や、顕在的あるいは潜在的なプランと結びつく。そしてその記憶は最初の経験の後も長期間にわたって、その人を励まし動機づけ刺激し続ける」(Pillemer, 2001, p.127)。すなわち、こうした出来事は経験した時点において影響を及ぼすだけでなく、繰り返し想起され、記憶として影響を及ぼし続けるという。さらにこうした記憶は、「その時点での個人的な環境についての詳細な説明を含んでいる。また感覚イメージ (視覚, 聴覚, 嗅覚, 触覚) を含んでいる。この記憶を思い出す人は、その出来事が現実に起きたことを信じている」(Pillemer, 2001, p.124) という。すなわち、鮮明に確信を持って想起されるという意味で、個人的出来事記憶は特徴的な想起過程を伴っているというのである。

たしかに上記の記憶は非常に鮮明である。また鮮明なだけでなく、想起頻度が高いことを示唆するケースも報告されている。以下に紹介するのは、記憶が信念や態度形成の基盤となり、判断の拠り所 (アンカー) として機能している例である。Pillemer は「最初の出来事そのものよりも、繰り返し想起される記憶が信念や態度を支え続けている」と主張する (Pillemer, 2001, p.128)。

ある教授が、自分の知っている最も優秀な人たちはウェルズリー (筆者注: Pillemer が調査対象とした大学) の自分のクラスの出身者だっておっしゃいました。先生がウェルズリーの学生をこんなにも高く評価していることが、私の気持ちを後押ししてくれました。私は自分の能力をそんなに低く評価していなかったのですが、それでもそれ以来、自分の能力に疑問を感じたり、人からそんな目で見られて嫌になると、先生の言葉を思い出すのです。そして他の人にもできたのだから、私だってできるわって気分になるのです。(Pillemer, 1998, p.74)

このように個人的出来事記憶は独自の機能を担っており、かつ繰り返し鮮明に想起されるという意味で、記憶としての独自性を有している可能性も高いと思われる。しかし Pillemer の議論は、多数の事例に基づいているものの、必ずしも十分な検証を経ているわけではない。むしろ「個人的出

来事記憶は、強い確信度を伴って鮮明に繰り返し想起され、指示機能を発揮し続ける」という仮説を、自明のこととして扱っているかのようである。

(4) 記憶としての独自性—語りの構造

上で紹介した McAdams や Woike たちの研究では、動機と結びついた記憶が独自の構造をもって語られることが指摘されている。McAdams らは生殖性の高い人と低い人のライフストーリーを比較し、生殖性の高い人では、悪い出来事や否定的な感情の後に良い出来事や肯定的な感情が語られやすいことを見出した。「夫の性的問題に苦しんだが、そのことから自分の人生を自分でコントロールするようになった」という例がこれにあたる。一方生殖性の低い人では、良い出来事の後に悪い出来事が語られやすかった。「完璧な模型飛行機を作ったのに、いじめっ子にそれを壊された」という例がこれにあたる (McAdams, Diamond, Aubin, & Mansfield, 1997; McAdams, Hart, & Maruna, 1998)。また Woike et al. (1999) は想起内容が「分化」と「統合」のいずれの視点から記述されているか検討した。分化とは「僕は良い聞き手で、彼は良い語り手だった」というように内容を対比的にとらえる記述であり、統合とは「兄は父と同じように状況に対処した」というように内容同士の関連や類似性を強調する記述である。その結果、「親密さ」動機の強い人は「力」動機の強い人に比べると、統合的な記述が多かった。

個々人の動機が違えば、同じ経験であっても異なった語られ方をされるというのであれば、そこに動機に基づく独自の想起過程を考えることが出来るだろう。しかしこれらの研究では、動機—経験—語り構造 (自伝的記憶) が一体となっている。すなわち、語り構造の個人差はそもそも経験の違いを反映しているに過ぎず、必ずしも想起過程の独自性を示しているとは限らない、とも考えられるのである。

(5) 記憶としての独自性—想起過程における差異

Pillemer や Singer たちは、自己機能や指示機能を有する記憶は、そうでない記憶に比べると、繰り返し鮮明に想起されると仮定している。しかしながら、こうした記憶とそうでない記憶で、鮮明さや想起頻度を比較しているわけではない。はたして重要な出来事の記憶はとりわけ鮮明に想起される—より一般的には、記憶内容が特殊であれば、想起過程も特殊である—と考えて良いものだろうか。この問題について、トラウマ記憶の特殊性を巡る議論がヒントを与えてくれる。

非常に不快な感情を伴って経験された出来事は、トラウマ記憶として、記憶の中でも特殊な位置を占めると考えられることが多い。特に事例研究からは、トラウマ記憶は断片化しており、一貫性に欠けると指摘される (Berntsen & Rubin, 2006; Byrne, Hyman, & Scott, 2001; Porter & Birt, 2001)。しかしトラウマ記憶に限らず、時間経過に伴い断片化することは十分考えられる。トラウマという内容の特殊性が想起過程の特殊性を伴うと考える必然性は無いのである。

非トラウマ的な記憶と比較して、トラウマ記憶の特性を検討した研究はほとんど行われていない。数少ない実証的な検討の一つに Porter & Birt (2001) によるものがある。Porter らは大学生を対象に、これまでの人生で最もトラウマ的な経験と、最もポジティブな感情を伴う経験を想起させ、鮮

明さ等の評定を求めた。その結果、ポジティブ記憶に比べてトラウマ記憶は記述内容が詳細で、自身の感情状態に言及することが多く、これまでの想起頻度も高かった。その一方で、記憶の鮮明さ、一貫性、全体的な質 (poor/excellent) はポジティブ記憶と差が無かったのである。Byrne et al. (2001) はトラウマ経験・ネガティブ経験・ポジティブ経験の想起特性を比較した。その結果、全体的な鮮明さ、詳細さ、一貫性、正確さに対する確信度、リハーサル頻度は、3種類の記憶の間に差が無かった。また視覚的細部情報の量や聴覚的細部情報の量、その出来事の直前の出来事の記憶などはポジティブ記憶が優れており、トラウマ記憶とネガティブ記憶の間には差が無かった。

特別な記憶内容が特別な想起過程を伴うというのは、自明のことと思われるかもしれない。しかし現実にそうとは限らないのである。

3. 記憶特性の検討

(1) 本研究の目的

これまで自伝的記憶の機能を検討した研究では、出来事そのものではなく記憶が機能を発揮しているという点についての確認が不十分であった。本研究では、自己機能や指示機能を有する記憶が独自の想起過程を伴っていることを、記憶特性の検討を通じて明らかにすることで、「出来事」そのものではなく「出来事の記憶」が重要な機能を果たしていることを示したい。

佐藤 (2000) は教師にまつわる自伝的記憶を収集し、その中に、職業選択や価値観・態度形成などに関わる出来事が多数含まれていることを見出した。さらに想起の鮮明度や想起頻度についても検討を加えた結果、「その後の自分に影響を与えた」と認識されている出来事は、そうでない出来事に比べると、より鮮明かつ頻繁に想起されていることを見出した。すなわち、過去の出来事そのものが影響しただけでなく、過去の出来事を自伝的記憶として想起し、それを出発点やアンカーとして認識したり、過去と現在の一貫性を認識したりすることが、判断や行動に影響を与えていると考えられる。しかし佐藤 (2000) では、記憶の鮮明度と想起頻度のみを検討したに過ぎず、また鮮明度・想起頻度とも一部の参加者についてしか検討されていなかった。

そこで本研究では参加者に、中学時代の教師にまつわる記憶の想起を求め、より包括的に様々な視点から記憶特性を検討する。参加者にはまず、中学時代の教師にまつわる三つの出来事の想起を求める。そして「その経験から何かを学んだ」「その経験がその後の自分に影響を与えた」「自分を理解するのに、その経験が重要な意味を持っている」という視点から、三つの出来事を順位づけてもらうことにより、自己機能や指示機能を有する重要な出来事と、そうでない出来事を収集する。そしてこれらの出来事の記憶特性を評定させ、重要な出来事の記憶が内容だけでなく想起過程においても特殊であるのか検討する。

また本研究では、幅広い年齢層 (19-50 歳) の参加者を対象とすることにより、時間経過が想起過程に及ぼす影響を検討する。自伝的記憶が時間経過に伴って忘却されることを考えるなら (Linton, 1982; Rubin, 1982; Wagenaar, 1986; White, 2002), 想起される記憶の鮮明さや詳細さは、時間が

経つほど低下すると予想される。一方、本研究で収集されるのが重要度の高い記憶であることを考えると、それらは自己定義記憶 (Singer & Blagov, 2004) や個人的出来事記憶 (Pillemer, 2001) として、時間経過にもかかわらず鮮明に想起されるという予測も可能であろう。

(2) 先行研究における記憶特性の評価

これまでの自伝的記憶研究では、出来事の新奇性や経験時の感情を問うたり (例: Wagenaar, 1986), 想起の鮮明度や想起頻度を問うことが多かった (例: Rubin & Schulkind, 1997)。また、記憶特性をより包括的に検討するための尺度も作成されている。記憶特性は、出来事そのものに関わる特性と、想起経験に関わる特性に分けられる。Berntsen & Rubin (2006) はトラウマ経験がその人のライフストーリーやアイデンティティにとってどれほど中心的なものとして認識されているかを検討する尺度 (centrality of event scale: CES) を開発した (表 1)。これは出来事そのものに対する認識や意味づけを問う尺度である。一方, Johnson, Foley, Suengas, & Raye (1988) はリアリティ・モニタリング研究の発想に則り, 自伝的記憶の想起経験がどのような現象的特性を伴っているかを検討した。Johnson らは参加者に実際に経験した出来事と想像上の出来事の想起を求め, 38 項目からなる「記憶特性質問紙 (memory characteristics questionnaire: MCQ)」によって想起経験を評定させた。高橋・清水 (2002) は, これら 38 項目が表 2 に示す 8 因子から構成されていることを見出している。また Rubin, Schrauf, & Greenberg (2003) は, 自伝的記憶の想起に伴う主観的な感覚として, 「その出来事を再体験しているという感覚」と「その記憶が正しいという確信」という二つを重視した。さらに, 出来事そのものの特性や, 想起過程を検討する項目を含めて, 19 項目からなる「自伝的記憶質問紙 (autobiographical memory questionnaire: AMQ)」を構成した (表 3)。

表 1 Berntsen & Rubin の出来事の中心性質問紙 (Berntsen & Rubin, 2006)

カテゴリー	項目例
参照点	<ul style="list-style-type: none"> この出来事は私が他の経験について考えたり感じたりするやり方に影響を与えた。 この出来事は私が自新たな経験を理解するための参照点となった。
アイデンティティ	<ul style="list-style-type: none"> この出来事は私のアイデンティティの一部になったと感じる。 この出来事は私のライフストーリーの中心的な部分になっていると感じる。
ターニングポイント	<ul style="list-style-type: none"> この出来事は私の人生を永続的に変えた。 この出来事は私の人生のターニングポイントだった。

表2 Johnson らの記憶特性質問紙 (Johnson et al., 1988 ; 高橋・清水, 2002)

因子	項目例
鮮明度	この出来事の記憶全体の鮮明度は、きわめてはっきりしている
事後回想	振り返ってみると、この出来事は大きな意味を持っていた。
時間情報	この出来事が何年に起こったか、はっきりしている。
全体印象	そのときの感じは、良かった。
感覚経験	この出来事の記憶には、匂いがたくさんある。
空間情報	この出来事の記憶の中の事物の位置関係は、はっきりしている。
奇異性	出来事の筋が奇妙である。
前後関係	この出来事の前に起こった関係する出来事を、はっきり覚えている。

表3 Rubin らの自伝的記憶質問紙 (Rubin, Schrauf, & Greenberg, 2003)

カテゴリー	項目例
再体験	<ul style="list-style-type: none"> ・私はもとの出来事をもう一度くり返しているように感じる。 ・その出来事が私の身に起きたと知っているだけでなく、思い出することができる。 ・その出来事を思い出すと、現在から振り返って観察しているというよりは、そのときに引き戻されて再び主人公になったように感じる。
確信	<ul style="list-style-type: none"> ・その出来事は自分が思い出した通りに起きたものであり、想像や脚色は混ざっていない。
出来事	<ul style="list-style-type: none"> ・この記憶は重要なメッセージを与えてくれたり、アンカーやターニングポイントになっているという意味で、私の人生にとって重要だ。 ・それは特定の時点で一回だけ起きた出来事である。
想起過程	<ul style="list-style-type: none"> ・その出来事を心の中で見ることができる。 ・その出来事を思い出すと、断片的な事実や一場面ではなく、一貫したストーリーとして浮かんでくる。 ・その出来事を思い出すと、当時と同じ気分を感じる。

(3) 本研究で検討する特性

自伝的記憶の記憶特性を検討した研究では、上記の Johnson et al. (1988) の尺度等を参考に、研究目的に合致した項目を設定することが多い。本研究は、重要な機能を有する記憶とそうでない記憶の記憶特性を、詳細に比較検討することを目的としている。そこで Johnson et al. (1988) や Rubin et al. (2003) の尺度を中心に、自伝的記憶の記憶特性を検討したその他の先行研究 (例: Brewer, 1988 ; Herz & Schooler, 2002 ; Larsen, 1998 ; Porter & Birt, 2001 ; Rubin & Schulkind, 1997) も参考にして、出来事 (中心性, 新奇性, 感情, 特定性) と想起過程 (鮮明さ, 再体験の感覚, 正確への信念, 一貫性, リハーサル頻度, 等) を評価する項目を作成した (表 4-1, 4-2)。

出来事の評価 出来事そのものに関しては、出来事の「中心性」「感情」等を問うた。「出来事を中心性」は Berntsen & Rubin (2006) の尺度に修正を加えたものである。Berntsen らの尺度は、(1)

重要な出来事はアイデンティティにおいて重要な位置を占め自己理解に影響する、(2) 重要な出来事はターニングポイントとなり「あの出来事が人生を変えた」という認識を引き起こす、(3) 重要な出来事は参照点となり様々な判断に利用される、という仮説に基づいて構成されていた。しかしながらもともとの発想がトラウマ記憶の特殊性を検討することであり、また「参照点 (reference point)」といった難解な表現もそのまま用いられていた。本研究で扱う記憶は中学時代の教師を巡る出来事であり、それが「ターニングポイント」になる可能性は事故や犯罪の被害経験ほどには高くはないと考えられる。そこで、アイデンティティと参照点に関連する7項目を用いるとともに、Johnsonらの尺度を参考に、出来事の重要性を問う4項目を設定した。以上の「中心性」に、経験時の感情や新奇性など自伝的記憶研究では標準的な項目を加えた。また特定性を評価する項目(16)も加えた。

表4-1 本研究で検討する記憶特性(出来事)

【1 出来事】

1-1 出来事を中心性

〈アイデンティティ〉

- 1 この出来事は私という人間をよく表している。
- 2 この出来事は私がどんな人間であるかということを見せてくれる。
- 3 この出来事と今の自分との間につながりが感じられる。
- 4 この出来事は私の人生における重要なテーマを象徴している。
- 5 自分の人生を物語にたとえると、この出来事はその中の中心的な部分になっている。

〈参照点〉

- 6 この出来事から私は大切なことを学んだ。
- 7 この出来事は物事に対する私の考え方や感じ方に影響を与えた。

〈重要性〉

- 8 その当時、この出来事が自分にとって大きな意味を持つと思った。
- 9 振り返ってみるとこの出来事は、自分にとって大きな意味を持っていた。
- 10 この出来事は私にとって重要である。
- 11 この出来事は私に影響を及ぼした。

1-2 感情

- 12 この出来事に非常に驚いた。
- 13 この出来事を経験したときの感情や気分は良かった。
- 14 この出来事を経験したときの感情や気分は悪かった。

1-3 その他

- 15 この出来事は珍しいことだった。
- 16 これは特定の場所と時刻に起きた出来事の記憶か、あるいは、かなり長い時間(1日以上)にわたる出来事の記憶か、あるいは似たような出来事が何回かあってそれらが混ざり合った記憶か。

* 16「出来事の特定性」については、「特定の出来事」「かなり長い時間にわたる出来事」「混ざり合った記憶」の中から選択させた。他は1~7の7段階評定である。

表 4-2 本研究で検討する記憶特性（想起過程）

【2 想起過程】

2-1 鮮明さ

- 17 この出来事の記憶は、はっきりしている。
- 18 この出来事の記憶は、詳細である。
- 19 この出来事を全体的に、よく覚えている。
- 20 この出来事の記憶には欠けている部分がある。
- 21 この出来事を思い出すと、場面が目浮かぶ。
- 22 この出来事を思い出すと、音や声が聞こえてくる。
- 23 この出来事を思い出すと、匂いがよみがえってくる。
- 24 この出来事を思い出すと、味覚がよみがえってくる。
- 25 この出来事を思い出すと、触覚がよみがえってくる。

2-2 一貫性

- 26 この出来事に先だって起きた出来事を覚えている。
- 27 この出来事の後に続いて起きた出来事を覚えている。
- 28 この出来事を思い出すと、いくつかの場面がバラバラではなく、一つにつながった物語として思い出される。
- 29 この出来事と関連する他の記憶がたくさん思い出される。

2-3 正確さへの確信

- 30 この出来事の記憶は正確である。
- 31 この出来事は自分が思い出している通りに起きたことであり、私の想像は混ざっていない。

2-4 再体験の感覚

- 32 この出来事を思い出すと、そのときの感情を再び体験している気がする。
- 33 この出来事を思い出すと、そのときに引き戻される感じがする。
- 34 この出来事が起きたときに自分がどう感じたか思い出せる。
- 35 この出来事を思い出すと、再び経験しているような気持ちになる。
- 36 時には人は、何か起きたことはわかっているが思い出せないという場合がある。この出来事については、単にそれが起きたと分かっているだけではなく、実際に思い出することができる。

2-5 想起の視点

- 37 この出来事を思い出すと、当時見たまを自分の目でもう一度見ているような気がする／当時とは異なる視点から観察しているような気がする。

2-6 リハーサル

- 38 この出来事の記憶が突然心に浮かぶことがある。
- 39 この出来事について、これまで何度も思い出したり考えた。
- 40 この出来事についてこれまで何度も人に話した。

2-7 感情

- 41 この出来事を思い出して、今感じる感情や気分は良い。
- 42 この出来事を思い出して、今感じる感情や気分は悪い。
- 43 この出来事を思い出すと、心臓がドキドキしたり、汗ばんだりする。

2-8 その他

- 44 この出来事を思い出すのは簡単だ。
- 45 この出来事の当時から現在までの時間経過を考えると、もうそんなに経ったのかと思われる。

* 37「視点」については、「自分の目でもう一度見ている」「異なる視点から観察している」から選択させた。他は1～7の7段階評定である。

想起過程の評価 想起過程に関して、佐藤（2000）では想起の鮮明度とリハーサル頻度のみを問うていた。本研究では感情やリハーサル頻度など自伝的記憶研究では標準的な項目に加えて、想起過程を多面的にとらえる項目を設定した。

「想起の鮮明さ」について、佐藤（2000）では「鮮明か」という1項目のみで問うていたが、Johnson et al.（1988）や Rubin et al.（2003）を参考に、感覚モダリティごとの項目も加えて、詳細に検討した。同様に Johnson らの尺度を参考に、「一貫性」を問う項目も加えた。トラウマ記憶の研究では、トラウマ記憶は他の出来事から切り離されて単独で想起されるという仮説と、他の出来事と結びつけられてライフストーリーの重要な一部を構成するという仮説が提起されている（Berntsen, Willert, & Rubin, 2003; Porter & Birt, 2001）。Berntsen et al.（2003）は、トラウマ記憶は参照点として機能し、他の記憶と結びついていることを指摘した。本研究で収集されるのは不快よりも快な出来事が多いことが佐藤（2000）からも予想されるが、重要な記憶は快・不快に関わらず、他の記憶と結びついて物語を構成しているのではないかと予想される。

Rubin et al.（2003）の自伝的記憶質問紙にならない、「正確さへの確信」と「その出来事を再体験している感覚」を問う項目を加えた。後者について Rubin らの尺度では“reliving”あるいは“travel back”という表現が用いられているが、多くの先行研究がこうした再体験感覚を、エピソード記憶あるいは自伝的記憶想起の重要な特徴として位置づけている（Baddeley, 1992; Brewer, 1996; Wheeler, Stuss, & Tulving, 1997）。再体験感覚を問う項目36は、想起意識を実験的に検討する研究で用いられる Remember/Know 手続き（Gardiner, 1988）に準ずる質問である。

「想起の視点」は Nigro & Neisser（1983）が提唱した想起特性である。この特性に関する研究は少ないが、強い感情や自己意識を伴う出来事あるいは古い出来事は、当時とは異なる視点で想起されやすいという結果が報告されている（Nigro & Neisser, 1983）。

項目45は当時から現在までの時間経過に対する評価であり、日常では「もう5年も経ったのか」といった感覚（feeling of time gap：時隔感）として経験される（下島, 2001）。厳密には想起過程とは言えないが、想起の鮮明度が高いほど時隔感が強いことから（下島, 2001）、想起過程に関連させて検討することとした。

Ⅱ 方法

1. 調査対象者

国立大学の教育学部学生と社会人（教育関連の複数の講習会参加者）を対象とした。不完全回答ならびに、後述する基準に照らして不適当と判断された回答は除かれた。最終的に大学生49名（男性22名、女性27名、平均年齢20.4歳、 $SD=1.0$ ）と社会人77名（男性21名、女性56名、平均年齢36.0歳、 $SD=5.9$ ）、計126名の回答が分析された。目的でも指摘したように、時間経過に伴って想起過程が変化することも予測される。そこで結果の分析に際しては参加者を年齢によって、19-22歳群49名（男性22名、女性27名、平均20.4歳、 $SD=1.0$ ）、26-34歳群39名（男性11名、女性28

名, 平均 31.0 歳, $SD=1.9$), 35-50 歳群 38 名 (男性 10 名, 女性 28 名, 平均 41.2 歳, $SD=3.9$) の 3 群に分けた。

2. 質問紙の構成と手続き

調査は講義時間を利用して一斉に行われた。参加者はフェイスシート記入後, 中学校時代の教師にまつわる記憶を三つ思い出して記入するよう求められた。中学時代に限定したのは, 佐藤(2000)で示されたように, この時期の記憶が他の時期に比べると, 教師にまつわる記憶の想起数が多いためである。記入に際しては「○○先生はよく～～していた」といった一般的な記述ではなく, 特定の一つの出来事(エピソード)をできるだけ具体的・詳細に書くよう指示を与えた。また何年生の時点の出来事かも記入させた。続いて, 想起された三つの出来事を重要度によって順位づけするよう求めた。その際に「『重要』とは, その経験から何かを学んだ, その経験がその後の自分に影響を与えた, 自分を理解するのにその経験が重要な意味を持っているといったことを指す」と教示を与えた。順位づけに加えて, 三つの出来事の重要度を 7 段階で評定させた(1: まったく重要ではない ~ 7: とても重要である)。続いて, 三つの出来事のうち一番重要と評定された出来事について, それがどういう意味で重要なのか, 自由記述での回答を求めた。最後に三つの出来事それぞれについて, 記憶特性を問う 45 項目(表 4-1, 4-2 参照)への評定を求めた。評定は基本的に 1(まったく, そう思わない) ~ 7(とても, そう思う)の 7 段階であった。ただし「出来事の特定性(表 4-1, 項目 16)」については, 「特定の出来事」「かなり長い時間にわたる出来事」「類似の経験が混ざり合った記憶」の中から選択させた。また「視点(表 4-2, 項目 37)」については, 「自分の目でもう一度見ている」「異なる視点から観察している」から選択させた。回答には全体で 25~45 分を要した。

III 結果

最も重要な出来事の重要度評定が, 7 段階の 5(やや重要)未満であった参加者, また三つの出来事の重要度評定が全て同じであった参加者は, 分析から除いた。参加者は三つの出来事を想起して重要度に従って順位づけを行ったが, 1 位と 2 位あるいは 2 位と 3 位の出来事の重要度評定値が等しいケースが認められた(1 位と 2 位の重要度が等しいケースは 21 名。2 位と 3 位の重要度が等しいケースは 29 名)。そこで重要度によって記憶特性に差があるか検討する際には, 1 位・2 位・3 位の出来事を相互に比較するのではなく, 1 位と 3 位の出来事を比較する。

結果は以下の順序で分析する。まず評定結果に因子分析を行い記憶特性を整理する。続いて出来事に関する評定(表 4-1)の結果と自由記述の分析から, 収集された重要な出来事が様々な機能を担っているものであることを確認する。次いで, 重要度が 1 位の出来事と 3 位の出来事で, 出来事を経験した時点からの経過年数, 想起内容の特定性, 想起順位に差が無いか検討する。これは出来事の重要度によって想起過程に差異があることが認められたとしても, それが経過年数等によるアーチファクトではないことを確認するためである。そして最後に, 重要な出来事が想起過程にお

いても独自性を有しているか検討するために、重要度1位の出来事と3位の出来事の想起過程に関する評定(表4-2)の結果を比較する。

1. 因子分析

自伝的記憶の記憶特性に関する従来の検討は十分ではなく、記憶特性を測定する標準的な尺度が開発されているわけではない。多くの研究は Johnson, Foley, Suengas, & Raye (1988) の記憶特性質問紙 (MCQ) 等を参考に、研究目的に合致した項目を抽出して使用している。そのため先行研究の中には、20以上の項目を設定し、それらを個別に分析したものもある (Berntsen & Thomsen, 2005; Byrne, Hyman, & Scott, 2001; Rubin, Feldman, & Beckham, 2004)。本研究では記憶特性をできるだけ詳細に比較検討することを目的に、出来事そのものの特性と想起過程の特性あわせて45項目を設定した。ここでは因子分析の結果に基づいて項目をまとめた上で、重要度との関連を検討する。

重要度1位と評価された出来事に対する評定結果(項目16「特定性」と項目37「視点」を除く43項目)について因子分析を行い(重み付けの無い最小二乗法, Varimax 回転), 固有値1以上の基準及び解釈可能性を考慮して, 適切な因子数を9とした(表5)。これら9つの因子は, 出来事に関わる3因子, 想起過程に関わる5因子, 出来事と想起過程双方の感情に関わる1因子である。出来事に関わる因子は, (1) 重要性(因子2, $\alpha = .90$, 例: この出来事は私にとって重要である), (2) 自己(因子7, $\alpha = .96$, 例: この出来事は私という人間をよく表している), (3) 新奇性(因子8, $\alpha = .79$, 例: この出来事に非常に驚いた)である。想起過程に関わる因子は, (1) 鮮明さ(因子1, $\alpha = .92$, 例: この出来事の記憶は詳細である), (2) 再体験(因子4, $\alpha = .83$, 例: この出来事を思い出すと, そのときに引き戻される感じがする), (3) 一貫性(因子5, $\alpha = .83$, 例: この出来事の後に続いて起きた出来事を覚えている), (4) 身体感覚(因子6, $\alpha = .83$, 例: この出来事を思い出すと, 味覚がよみがえる), (5) リハーサル(因子9, $\alpha = .67$, 例: この出来事について, これまで何度も思い出したり考えた)である。感情に関わる因子は, 感情(因子3, $\alpha = .95$, 例: この出来事を経験したときの感情や気分は良かった)である。なお重要度3位の出来事に対する評定結果を因子分析した場合にも, ほぼ同じ因子構造が見出された。

本研究では先行研究を参考に, 出来事と想起過程という二つの領域を設定し, それぞれに「中心性」や「鮮明さ」といった下位カテゴリーを設定していた(表4-1,4-2参照)。抽出された因子はこれらと整合する内容であった。

出来事の中心性については, 「重要性」「アイデンティティ」「参照点」という三つの下位概念を想定して項目を設定した。これらはもともと Berntsen & Rubin (2006) の尺度で, ト라우マ経験の記憶特性を検討するために用いられていた項目群である。この尺度は, ト라우マ記憶はその人のライフストーリーにとってターニングポイントとなっており, 参照点やアンカーとして機能し, アイデンティティの中心を占めるという発想から構成されていた。ただし彼らの研究でも, 因子分析の結果は1因子構造を示していた。本研究では出来事の「重要性」を意味する因子に多くの項目が集まっ

表5 記憶特性の因子分析結果

	因子1 鮮明さ	因子2 重要性	因子3 感情	因子4 再体験	因子5 一貫性	因子6 身体感覚	因子7 自己	因子8 新奇性	因子9 リハーサル
18 詳細である	0.885	0.193	-0.073	0.056	0.117	0.107	0.029	0.081	0.148
19 よく覚えている	0.848	0.161	-0.071	0.062	0.155	0.100	-0.013	0.046	0.147
30 正確である	0.829	0.157	-0.007	0.108	0.121	-0.054	0.080	0.057	0.087
17 はっきりしている	0.816	0.229	-0.025	0.028	0.069	0.099	-0.009	0.150	0.035
20 欠けている部分がある	0.744	0.082	-0.053	0.074	0.051	0.078	0.052	-0.049	0.001
36 実際に思い出すことができる	0.729	0.204	-0.071	0.224	0.210	-0.054	0.082	-0.068	0.022
21 場面が目につかぶ	0.677	0.103	-0.005	0.117	0.137	0.081	0.009	-0.017	-0.051
31 その通りに起きたことである	0.668	0.100	0.018	0.065	0.032	-0.070	0.118	0.135	0.009
44 思い出すのは簡単だ	0.570	0.242	0.042	0.072	0.113	-0.046	0.018	0.078	0.192
34 その時自分がどう感じたか思い出せる	0.430	0.338	-0.064	0.279	-0.049	-0.119	0.059	0.139	0.050
22 音や声が聞こえてくる	0.413	0.037	0.023	0.229	0.137	0.149	0.031	0.044	0.047
11 私に影響を及ぼした	0.205	0.822	0.122	0.077	-0.009	0.000	0.115	0.028	0.049
10 重要である	0.184	0.787	0.206	0.024	0.088	0.039	0.150	0.018	0.147
4 自分の人生における重要なテーマを象徴	0.116	0.751	0.146	0.109	0.178	0.030	0.147	-0.118	0.016
9 振り返ると大きな意味を持っていた	0.157	0.732	0.176	0.051	0.147	0.026	0.170	0.068	0.138
6 大切なことを学んだ	0.241	0.700	0.130	0.049	-0.022	0.120	-0.071	0.020	0.073
5 人生の物語の中心になる	0.131	0.695	0.174	0.139	0.233	0.106	0.285	0.017	0.159
3 今とのつながりが感じられる	0.142	0.653	0.108	0.023	0.217	0.006	0.266	-0.036	-0.047
7 考え方や感じ方に影響を与えた	0.151	0.653	0.030	0.082	-0.020	0.104	-0.081	0.059	0.160
8 当時大きな意味を持つと思った	0.172	0.339	0.096	0.285	0.149	0.072	-0.042	0.187	-0.192
14 経験したときの気分が悪かった	-0.072	0.134	0.931	0.050	-0.003	0.039	0.019	-0.028	-0.013
13 経験したときの気分が良かった	-0.057	0.196	0.897	0.136	0.040	0.078	0.005	0.035	0.016
41 思い出して今気分がよい	0.000	0.267	0.865	0.048	0.018	0.110	0.126	-0.021	0.033
42 思い出して今気分が悪い	-0.073	0.196	0.864	-0.059	-0.037	0.059	0.093	-0.078	0.043
35 再び経験している気持ちになる	0.212	0.068	0.084	0.813	0.120	0.087	0.151	0.064	0.125
32 その時の感情を再体験している気がする	0.151	0.120	-0.012	0.783	0.113	0.116	-0.029	0.096	0.015
33 そのときに引き戻される	0.170	0.055	0.020	0.773	0.061	0.095	0.043	-0.008	0.121
38 突然心につかぶことがある	0.193	0.151	0.084	0.471	0.136	0.046	0.256	-0.046	0.407
43 心臓がドキドキしたり汗ばむ	0.080	0.087	-0.044	0.420	0.182	0.396	0.023	0.119	0.226
45 もうそんなに経ったのかと思われる	-0.112	0.068	0.218	0.377	0.151	0.053	0.094	0.135	-0.035
27 後に続いて起きた出来事を覚えている	0.192	0.134	-0.090	0.162	0.824	0.099	0.057	0.033	0.036
28 一つにつながった物語として思い出す	0.338	0.163	-0.012	0.169	0.708	0.019	0.002	0.072	0.191
26 先だって起きた出来事を覚えている	0.219	0.134	0.055	0.089	0.677	0.098	0.049	-0.004	0.015
29 関連する他の記憶が思い出される	0.039	0.109	0.174	0.236	0.478	0.110	-0.012	0.028	0.249
24 味覚がよみがえる	-0.011	0.108	0.109	0.041	0.013	0.882	0.008	-0.017	-0.012
23 匂いがよみがえる	0.026	0.072	0.046	0.152	0.055	0.832	0.045	-0.055	-0.068
25 触覚がよみがえる	0.124	0.059	0.102	0.105	0.114	0.690	-0.015	-0.025	0.067
1 私という人間をよく表す	0.096	0.245	0.101	0.100	0.055	0.023	0.928	-0.099	0.019
2 私がどんな人間か教える	0.140	0.262	0.109	0.129	0.028	0.018	0.845	-0.033	0.051
12 驚いた	0.028	-0.035	-0.047	0.139	-0.030	-0.008	-0.043	0.853	0.077
15 珍しい出来事だった	0.260	0.087	-0.033	0.051	0.105	-0.073	-0.072	0.718	0.103
39 これまで何度も思い出した	0.245	0.285	0.007	0.305	0.160	-0.134	0.112	0.071	0.747
40 これまで何度も人に話した	0.109	0.223	0.044	0.089	0.098	0.107	-0.046	0.184	0.524
寄与率	14.74	12.34	8.21	7.21	5.55	5.51	4.69	3.51	3.37
累積寄与率	14.74	27.08	35.29	42.5	48.05	53.56	58.25	61.76	65.13

たのも、このことと整合している。

一方、「この出来事は私という人間をよく表している」「私がどんな人間であるかということを教えてくれる」の2項目は、「重要性」とは別に「自己」因子を構成していた。「重要性」因子に含まれる項目の多くは「影響を及ぼした」「大切なことを学んだ」等、その出来事が影響を与えたことを意味している。これに対し「自己」因子の2項目は、その出来事が自分を象徴していることを意味している。

想起過程については、鮮明さ、再体験、一貫性、身体感覚、リハーサル、という5因子が抽出された。「鮮明さ」因子には「詳細である」「目につかぶ」といった項目に加えて、記憶の正確さへの

確信（「この出来事の記憶は正確である」「この出来事は自分が思い出している通りに起きた」）も含まれていた。Rubin et al. (2003) の自伝的記憶質問紙を用いた検討でも、正確さへの確信は、「視覚的な鮮明さ」や「その状況を想起できる」という項目と高い相関を示していた。鮮明に想起できる記憶については確信度が高くなるのである。鮮明さとは別に、味覚・嗅覚・触覚が「身体感覚」因子を構成していた。Johnson et al. (1988) の記憶特性質問紙を因子分析した高橋・清水 (2002) でも、これら身体感覚は一つの因子を構成している。身体感覚は「鮮明に、詳細に思い出せる」という感覚とは異質なのであろう。

Rubin et al. (2003) は自伝的記憶の想起過程に伴う主要な感覚として、正確さへの確信と再体験感覚の二つがあることを主張した（表3参照）。本研究の結果も、「正確への確信」とは別に、「再体験」因子を示している。そしてこの因子の中に、「もうそんなに経ったのかと思われる」という時隔感も含まれていた。これまでの研究でも、時隔感は想起の鮮明度と関連することが指摘されていた（下島, 2001）。その状況に引き戻されるような感覚を伴うほど、「ついこの間の出来事」であるかのように思われ、現実の時間経過と比べると「もうそんなに経ったのか」という感覚を引き起こすのであろう。

また、その出来事と他の出来事がつながって一貫したストーリーとして想起されることを意味する、「一貫性」因子が見出された。Talarico & Rubin (2003) は2001年に起きた9.11テロに関わるフラッシュバルブ記憶を検討し、時間が経過しても鮮明度や確信度は低下しないが、一貫性は低下することを見出している。このことから、一貫性は鮮明さや確信とは独立した想起過程であることが推測される。

本研究で用いた45項目は、記憶特性をできるだけ多くの視点から検討することを念頭に、先行研究に基づいて設定された。特に鮮明さと重要性に関わる項目が多くなっており、記憶特性の尺度としては偏っているかもしれない。しかし本研究の目的は、重要な記憶とそうでない記憶で、想起過程に違いがあるかを詳細に比較することにある。そのための評定尺度としては内容的に妥当であり、信頼性を備えていると言えよう。

2. 収集された出来事の特徴と機能

出来事に関わる記憶特性である「重要性」「自己」「新奇性」の各因子について評定平均を算出し、重要度が1位の出来事と3位の出来事について整理した。「感情」は、経験時の感情と想起時の感情がまとまって一つの因子を構成していたが、ここでは経験時の感情に関わる2項目（表4-1の項目13と14、14については逆転して集計）の平均を分析した。また項目13・14の評定値と4（どちらとも言えない）との差の絶対値を求めて平均し、感情強度の指標とした。

結果を、表6に示す。年齢群と重要度順位によって評定に差があるか、分散分析により検討した。その結果、「新奇性」以外の全てで、重要度順位の主効果が有意であった。すなわち重要度1位の出来事は3位の出来事に比較すると、その人に強い影響を及ぼし重要な意味を有すると認識されてい

表6 想起された出来事の重要度順位と評定結果

		出来事の重要度順位		F 値		
		1 位	3 位	重要度順位の 主効果	年齢群の 主効果	順位×群の 交互作用
重要性	19-22 歳群	5.28 (0.93)	3.05 (1.25)	406.0 ***	3.8 *	3.1
	26-34 歳群	5.23 (1.07)	2.40 (1.13)			
	35-50 歳群	5.45 (1.02)	3.28 (1.31)			
自己	19-22 歳群	4.27 (1.68)	3.53 (1.67)	35.3 ***	1.7	5.8 **
	26-34 歳群	4.83 (1.71)	2.68 (1.58)			
	35-50 歳群	4.59 (1.69)	3.91 (1.56)			
新奇性	19-22 歳群	4.30 (1.72)	4.40 (1.53)	2.7	0.4	2.5
	26-34 歳群	4.55 (1.75)	4.40 (2.09)			
	35-50 歳群	5.09 (1.54)	4.12 (1.73)			
感情	19-22 歳群	4.53 (2.29)	3.46 (2.19)	6.5 *	0.3	0.9
	26-34 歳群	4.64 (2.15)	3.89 (1.73)			
	35-50 歳群	4.20 (2.27)	4.00 (1.90)			
感情強度	19-22 歳群	2.22 (0.83)	2.03 (0.99)	6.0 *	2.1	0.3
	26-34 歳群	2.03 (0.99)	1.63 (0.95)			
	35-50 歳群	1.93 (1.21)	1.68 (1.13)			

感情は数値が大きいほど、快であることを示す。感情強度は0~3, それ以外は1~7の値をとる。
 () は SD。分散分析の自由度は、重要度順位の主効果が (1,123), 年齢群の主効果と交互作用が (2,123)。
 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

た。人はこうした出来事から大切な事柄を学んでおり、また、こうした出来事は今の自己と結びつき、自分がどんな人間であるかを象徴していると評価されていた。感情面では快感情を伴い、強度も強いことが示された。年齢群の主効果ならびに順位×群の交互作用が一部に認められたが、これは26-34歳群で重要度3位の出来事に対する評定が、他の2群よりも低かったことによるものである。

以上の評定に見られた結果は、参加者による自由記述からも支持される。参加者は最も重要と判定された出来事について、重要と考える理由を記述した。この記述は佐藤(2000)に準じて、以下の7つのカテゴリーに分類された。分類は二人の評定者が独立に行い(一致率74.6%), 不一致のケースについては再度分類し直した。各カテゴリーの例を表7に示す。

- (1) 考え：価値観や考え方等を学んだ。
- (2) 行動・性格・習慣の肯定的な変化：その出来事が原因(きっかけ)となり、何かができるようになった、精神的に成長した等、行動・性格や習慣に肯定的な変化が生じた。
- (3) 自己理解：自分を理解するのに役立った。
- (4) 教師への態度や教師モデル：教師という職業に対してある態度を形成したり(例、「教師になりたい」「教師への信頼性を失った」), 「こういう先生になりたい」というモデルとして意識した。
- (5) 進路：自分の進路選択に影響した(ただし「教職を志望するきっかけ」は(4)に分類する)。
- (6) 印象や感情：その場での印象や感情が強かったので覚えている。
- (7) その他

想起された出来事の中には、単に「その場の印象や感情が強かったから」という意味づけしかされてないものが23%あった。しかし残りの77%については、「その出来事から何かを学んだ」「行動や習慣が変化した」「自己理解につながった」「教師に対する態度が形成された」「教師としてのモデルになった」「進路選択に影響した」というかたちで、意味づけがされていた。これらは佐藤(2000)で収集された記憶と同様、様々なかたちで自己機能や指示機能を担っていることが推測される。いずれのケースも、その出来事を現在につながる出発点として認識するならば、当時の自己と現在の自己が一貫しているという感覚を与えてくれる。あるいは信念の基盤となり判断の拠り所(アンカー)として機能することも考えられる。「何かを学んだ」「教師としてのモデルとなった」という出来事は、もとの経験と類似した場面で想起され、行動を方向づけるだろう。これはPillemer(1998)

表7 その出来事を重要と考える理由

-
- (1) **考え** (24.6%) 当時同じクラスにいわゆる「ワル」がいて、授業中に突然先生に暴力を振るい出しました。教員は女性でしたが、涙をこぼすこともなく、その子に対して毅然とした態度で諭しました。結局その子は出て行ってしまったのですが、不安状態の私たちに配慮しつつも、授業が続けられました。自分が窮地に立たせられても、相手や周りに配慮できること。それが大人であり、指導者であることを学ぶことができた。
- (2) **行動・性格・習慣の肯定的な変化** (16.7%) 部活動のときに一度だけ大きなケンカがあり、チームメイトが二つに大きく割れてしまったことがあった。そのときに不安で、顧問の先生に何とかしてもらおうと相談しに行くと、先生は「私はそういう精神面のことについて口を出したくない。そういう揉め事を解決できるチームにならなきゃ。先生が口を出したって根本的には何も変わらない」と言われ、最初は見捨てられたように感じたが、よく考えると、先生も私たちのことを考えてくれてたんだと感じた。他人に甘えよう、頼ろうとしていた自分が、もっと自分の力でなんとかしようと思えるようになり、とても成長できたように思う。
- (3) **自己理解** (7.9%) 部活の顧問の先生に部活中に呼び出され、体育館の隅で二人で話をした。「おまえは電照菊のような子だ。周りの力で一所懸命手をかけられてきれいに咲かせてもらっているのに、自分一人で立派に咲いたような顔をして全然感謝していない。もっと強くてたくましい、野草のような子になれ」と言われた。自分を理解するのに重要な意味を持っている。それまで私はすごくわがままで、周囲のことより自分のことばかりを優先させてきた。そのことに少しずつ気づき始めていたが、この先生の言葉ではっきり自覚し、意識することができた。
- (4) **教師への態度や教師モデル** (15.1%) 担任の先生が土曜日に一人で教室の掃除をしていて、ある土曜日に自分も手伝ったこと。教師を目指す上で、何も言わずに黙々と掃除をする先生の姿は、自分にとっての一つの目標である。
- (5) **進路** (6.3%) クラスの担任で理科の先生。この先生は中学3年の自分に、理系に進むのがいいのではないかと伝えてくれました。そして卒業式のとき、アルバムに一言「理系に進め」と書いてくれました。私の進路を決めるときに大きな一言となった。
- (6) **印象や感情** (23.0%) 高校に合格したとき、報告に行ったら、一緒になって喜んでくれた。自分の喜びを一緒になって喜んでくれたことで、喜びが倍になった。
- (7) **その他** (6.3%) 3年生、部活最後の大会で、今までずっと勝ち続けていたのに、そこで負けてしまい、責任を感じ涙を流した。そのときに、声をかけてくれたこと。3年間の部活の締めくくりとして重要。
-

* 各カテゴリーの(数値)は、参加者全体に占める比率(%)

が指示機能の一つとして提唱した類推機能である。また「自己理解につながった」という出来事は、自己を象徴する機能を果たしていると考えられる。回答の中には下記に示すように、想起された出来事の記憶が上記の機能を果たしていることが比較的明瞭にうかがえる記述も認められた。

出発点：一年生の頃、一番仲の良かった友人が、少々クラスで上手くいっていなかったので、保健室に行っていることが多く、私も友人に会いに（もしくは慰めにかもしれないが）、しばしば保健室へ行っていた。あるとき、保健室の先生と友人と三人で、真剣に、その状況の対処法を暗くなるまで話し合った。（重要と考える理由は）真剣に人間関係の難しさや、こじれた関係の改善を考えたのは、これがはじめて。おそらくこのときに考えたことは、今の考え方にも影響している。

アンカー：先生の言った「他人の良いところを探しをしろ」という言葉が、今でも心の中に響いている。（重要と考える理由は）他者を理解する際、常に私の念頭に置かれている言葉である。苦手と思うような人でも、「いいところ」を見つけることによって、その人を認めることができる。教師の放った言葉を胸に、私はこれまで実に多くの人と良い関わりをもつことができています。

類推：学校までスクールバスで通っていた。下校時、バス車内で発車待ちをしていると、騒いでいた友達を叱りに、怖いと評判の体育教師がいきなり車内に怒鳴り込んできて、自分は何もしていないのに、とても驚いて嫌な思いをした。（重要と考える理由は）むやみに怒鳴る人間にはなりたくないと思った。無関係の人にまで迷惑をかける（うるさい、驚く、等）ので、注意する際に大声を出すのは良くないと思うようになった。

自己：O先生は野球部の顧問をしていたが、ある日新しい先生がもう一人、野球部の顧問につくことになった。新人顧問の方も先生なので、生徒は指導されるとおりに（それまでとは別の）練習をした。すると威厳のあるはずのO先生が少しいじめてしまった。（重要と考える理由）教師はあまり感情を表すことが無いと思っていた私に、言葉は少なかったが、少しへこんでいるということが伝わってくるぐらいだった。意見を言える人がればいいが、少数派の人間やいじめられている人間の多くはあまり主張することができないし、私はいつも目の前にいる人や、ある出来事の裏にいる人の考えていることが気になっています。中学校のときにすでにその片鱗を見せていたなと思った。

ただし収集された記述は簡略なものも多く、本人がその出来事を出発点やアンカー等として意識しているか否かは、ライフストーリーを聴き取るなどして、さらに詳細に検討しなければわからない。また行動や判断に迷ったときに、こうした記憶が常に意識的に想起されているとも限らない。しかしこれらの記憶が、先行研究（Pillemer, 1998；佐藤, 2000）で明らかにされた自己機能や指示機能を有するものと類似していること、参加者自身がこうした記憶を重要で、自分に影響を及ぼした（及ぼし続けている）ものとして認識していることは間違いないだろう。

ではこのような重要な記憶は、想起過程においていかなる特徴を持っているのであろうか。

3. 想起された出来事の時間経過, 特定性, 想起順位

想起過程の特性を検討する前に, 重要度1位の出来事と3位の出来事が, 時価経過・特定性・想起順位において差が無いか検討する。以降の分析で重要度によって想起過程に差が認められた場合, それが時間経過等によるアーチファクトではないことを確認しておくためである。

中1・中2・中3の時点でそれぞれ13・14・15歳であったと仮定し, その出来事から現在までの経過年数を算出した。重要度1位の出来事と3位の出来事を経験してからの経過年数を, 表8に示す。年齢群×重要度順位の分散分析の結果, 年齢群の主効果のみ有意であった ($F(2,123) = 750.04, p < .0001$)。また, 出来事の特定性(項目16)について整理した結果を表9に示す。長期にわたる出来事や複数の出来事が混合して想起されたケースは, 「非特定の」としてまとめた。McNemar検定の結果いずれの年齢群でも, 重要度1位の出来事と3位の出来事で特定性の差は有意ではなかった(19-22歳群: $p = .424$, 26-34歳群: $p = .302$, 35-50歳群: $p = .180$)。最後に, 重要度1位の出来事と3位の出来事で想起順位に差があるか検討した。符号検定の結果, いずれの世代でも想起順位に有意差は無かった(19-22歳群: $Z = 1.14$, 26-34歳群: $Z = 0.32$, 35-50歳群: $Z = 1.46$)。

このように, 重要度1位の出来事と3位の出来事で, 経過年数や特定性には差が無いことが確認された。従って, 以降の分析で例えば「重要度1位の出来事は3位の出来事に比べて非常に鮮明に想起される」という結果が見出されても, 重要な出来事は比較的最近に経験されたためであるとか, 内容の特定性が高いことによるアーチファクトであるとは言えない。また想起順位に差がなかったことは, 参加者が想起順位を参照したヒューリスティクスによって想起過程を評価しているわけではないことを示唆している。

表8 想起された出来事から現在までの経過年数

	19-22歳群	26-34歳群	35-50歳群
重要度1位	6.1 (1.0)	16.8 (1.8)	27.1 (3.8)
重要度3位	6.3 (1.2)	17.1 (2.1)	27.0 (4.0)

()はSD

表9 想起された出来事の特定性

	19-22歳群		26-34歳群		35-50歳群	
	特定の	非特定の	特定の	非特定の	特定の	非特定の
重要度1位	41 (83.7)	8 (16.3)	27 (69.2)	12 (30.8)	24 (63.2)	14 (36.8)
重要度3位	37 (75.5)	12 (24.5)	22 (56.4)	17 (43.6)	18 (47.4)	20 (52.6)

数値は人数, ()は%

4. 想起過程の検討

鮮明さ, 再体験, 一貫性, 身体感覚, リハーサルの各因子の評定平均を算出し, 重要度が1位の出来事と3位の出来事について整理した。感情については出来事の記憶特性と同様, 想起時の感情

表10 想起された出来事の重要度順位と想起過程

		出来事の重要度順位		F 値		
		1 位	3 位	重要度順位の 主効果	年齢群の 主効果	順位×群の 交互作用
鮮明さ	19-22 歳群	5.25 (0.97)	4.72 (1.04)	45.4 ***	1.3	0.7
	26-34 歳群	5.12 (0.98)	4.34 (0.97)			
	35-50 歳群	5.15 (1.03)	4.33 (1.01)			
再体験	19-22 歳群	3.62 (1.20)	3.07 (1.15)	58.2 ***	0.2	1.3
	26-34 歳群	3.85 (1.26)	2.90 (1.10)			
	35-50 歳群	3.87 (1.33)	3.11 (1.21)			
一貫性	19-22 歳群	4.54 (1.50)	3.97 (1.33)	20.5 ***	4.4 **	0.2
	26-34 歳群	4.08 (1.40)	3.30 (1.16)			
	35-50 歳群	3.84 (1.66)	3.18 (1.52)			
身体感覚	19-22 歳群	2.10 (1.46)	1.72 (1.29)	0.1	1.1	1.8
	26-34 歳群	1.78 (1.35)	1.80 (1.11)			
	35-50 歳群	2.05 (1.25)	2.26 (1.54)			
リハーサル	19-22 歳群	3.72 (1.57)	2.91 (1.45)	54.3 ***	0.2	0.7
	26-34 歳群	3.80 (1.52)	2.81 (1.60)			
	35-50 歳群	4.07 (1.72)	2.86 (1.28)			
感情	19-22 歳群	4.88 (1.97)	4.05 (1.89)	11.0 **	0.1	0.8
	26-34 歳群	4.97 (1.82)	3.94 (1.67)			
	35-50 歳群	4.67 (1.93)	4.30 (1.56)			
感情強度	19-22 歳群	1.92 (1.01)	1.64 (0.95)	9.2 **	0.9	0.2
	26-34 歳群	1.87 (0.93)	1.42 (1.05)			
	35-50 歳群	1.72 (1.10)	1.38 (1.02)			

感情は数値が大きいほど、快であることを示す。感情強度は 0~3、それ以外は 1~7 の値をとる。
 () は SD。分散分析の自由度は、重要度順位の主効果が (1,123)、年齢群の主効果と交互作用が (2,123)。
 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

と感情強度を分析した (表 4-2 の項目 41, 42)。結果を表 10 に示す。年齢群と出来事の重要度順位によって評定に差があるか、分散分析により検討した。その結果、「身体感覚」を除く全ての指標で、重要度順位の主効果が有意であった。すなわち重要度 1 位の出来事は 3 位の出来事に比べると、より鮮明に、当時に引き戻される感覚を伴って想起され、想起内容が正確であるという確信を伴っていた。さらに前後の出来事や関連する出来事と一緒に、一貫したストーリーとして想起されやすかった。また、これまでも頻繁に想起されたり、他者に語られたりしていた。感情面では経験時と同様に快感情を伴い、強度も重要度 3 位の出来事より強かった。

いずれの因子でも重要度順位×年齢群の交互作用は有意ではなかった。年齢群の主効果は「一貫性」のみで有意であり、26-34 歳群・35-50 歳群の評定値が、19-22 歳群よりも低かった。Talarico & Rubin (2003) は 2001 年 9.11 テロのフラッシュバルブ記憶を検討し、一貫性は時間とともに低下するが、鮮明度や正確さへの確信は低下しないことを見出した。本研究の結果も、時間経過に伴って出来事同士のつながりは弱まるが、重要な出来事そのものは鮮明に、再体験の感覚と確信を伴って想起され続けることを示唆している。

想起の視点を分析したところ (表 11)、「当時と同じ視点」と「当時と異なる視点」が相半ばして

表11 想起の視点

	19-22 歳群		26-34 歳群		35-50 歳群	
	当時と同じ	当時と異なる	当時と同じ	当時と異なる	当時と同じ	当時と異なる
重要度 1 位	24 (49.0)	25 (51.0)	20 (51.3)	19 (48.7)	16 (42.1)	22 (57.9)
重要度 3 位	28 (57.1)	21 (42.9)	18 (46.2)	21 (53.8)	18 (47.4)	20 (52.6)

数値は人数，() は%

いた。McNemar 検定の結果、重要度と視点の間には、有意な関連は認められなかった(19-22 歳群： $p=.50$ ，26-34 歳群： $p=.77$ ，35-50 歳群： $p=0.79$)。

IV 考察

本研究は、様々な機能を担う自伝的記憶が、単に「出来事」として重要であるだけでなく、記憶としての特殊性を有していることを確認する目的で行われた。このことは一見自明に思えるが、実はこれまでの研究では十分に確認されていたとは言えない問題である。

参加者は中学校での教師にまつわる記憶を三つ想起し、それを重要性（「何かを学んだ」「自分に影響を与えた」「自己理解に関わる」程度）に従って順位づけした。そして三つの記憶に対して、記憶特性（出来事そのものの特性と想起過程の特性）を評価した。出来事の特長として「重要性」「自己」「新奇性」の3因子、想起過程の特性として「鮮明さ」「再体験」「一貫性」「身体感覚」「リハーサル」の5因子、そして出来事と想起過程の両方に関わる「感情」因子が確認された。

参加者が想起した三つの中で重要度1位の出来事は、出来事に関わる記憶特性の分析から、自己にとって重要な意味を持つと認識されていることが確認された。重要度が高い出来事はそれだけ影響力があり、そこから大切なことを学んでおり、当時も今も大きな意味を持ち、今の自分とつながり、自分がどんな人間であるかを示しているのである。また参加者自身による自由記述からも、こうした出来事の記憶が自己機能や指示機能を有していることが示唆された。

想起過程に関わる記憶特性を検討したところ、重要度1位の出来事は3位の出来事に比較すると、再体験の感覚を伴って細部に至るまで鮮明に想起され、「確かにあの通りの経験だった」という確信を引き起こすことが見出された。さらに他の出来事ともつながって、一貫したストーリーを構成していることが示された。また繰り返し思い出されたり、他者との会話で話題にされることも多かった。こうしたリハーサルは、記憶の鮮明さを維持している一つの要因と考えられる。佐藤（2002）は青年期と壮年期の協力者を対象に、約8週間の間隔を置いて2回繰り返し、自伝的記憶の想起を求めた。その結果、青年群では約57%、壮年群では約38%の出来事が入れ替わるが、重要度の高い出来事は2回に共通して想起されやすいことが見出された。これは、重要な出来事が繰り返し鮮明に想起されやすいという本研究の結果と合致する知見である。

従って重要な出来事は、その経験自体が特別な意味を有するだけでなく、想起の特殊性を有しているのである。こうした記憶としての特殊性は、中学時代から平均6年が経過した参加者だけで

なく、平均17年あるいは27年が経過した参加者においても確認された。時間経過に伴って他の記憶とのつながりが途切れることはあっても、重要な記憶は長い年月を経てもなお色褪せない想起特性を維持していると言える。なお、こうした想起過程の差異は、出来事の特定性や時間経過あるいは想起順位では説明できない。重要度1位の出来事と3位の出来事の間、特定性や時間経過、想起順位の差は無かったからである。

われわれの生涯は膨大な経験の蓄積から成り立っている。経験の中には、きわめて重要で、自己認識に影響を及ぼしたり、その後の考え方や行動に影響を及ぼす出来事がある。その一方で、こうした重要さを認識されない出来事も数多い。本研究の結果は、重要な出来事は、それを経験した時点で意味ある影響を及ぼすだけでなく、繰り返し鮮明に想起される記憶として、重要な機能を発揮し続けることを示している。Pillemer や Singer たちが自明のこととしていた仮説が、本研究によって検証されたと言える。

引用文献

- Baddeley, A. D. 1992 What is autobiographical memory? In M.A.Conway, D. C. Rubin, H. Spinnler, & W. A. Wagenaar (Eds.), *Theoretical perspectives on autobiographical memory*. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers. Pp.13-29.
- Berntsen, D., & Rubin, D. C. 2006 The centrality of event scale : A measure of integrating a trauma into one's identity and its relation to post-traumatic stress disorder symptoms. *Behaviour Research and Therapy*, **44**, 219-231.
- Berntsen, D., & Thomsen, D. K. 2005 Personal memories for remote historical events : Accuracy and clarity of flashbulb memories related to World War II. *Journal of Experimental Psychology : General*, **134**, 242-257.
- Berntsen, D., Willert, M., & Rubin, D. C. 2003 Splintered memories or vivid landmarks? Qualities and organization of traumatic memories with and without PTSD. *Applied Cognitive Psychology*, **17**, 675-693.
- Bluck, S. 2003 Autobiographical memory : Exploring its functions in everyday life. *Memory*, **11**, 113-123.
- Brewer, W. F. 1988 Memory for randomly sampled autobiographical events. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered : Ecological and traditional approaches to the study of memory*. Cambridge University Press. Pp.21-90.
- Brewer, W. F. 1996 What is recollective memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Remembering our past : Studies in autobiographical memory*. Cambridge University Press. Pp.19-66.
- Byrne, C. A., Hyman, I. E. Jr., & Scott, K. L. 2001 Comparisons of memories for traumatic events and other experiences. *Applied Cognitive Psychology*, **15**, S119-S133.
- Gardiner, J. M. 1988 Functional aspects of recollective experience. *Memory & Cognition*, **16**, 309-313.
- Herz, R. S., & Schooler, J. W. 2002 A naturalistic study of autobiographical memories evoked by olfactory and visual cues : Testing the Proustian hypothesis. *American Journal of Psychology*, **115**, 21-32.
- Hyman, I. E. Jr., & Faries, J. M. 1992 The functions of autobiographical memory. In M.A.Conway, D. C. Rubin, H. Spinnler, & W. A. Wagenaar (Eds.), *Theoretical perspectives on autobiographical memory*. Kluwer Academic Publishers. Pp.207-221.

- Johnson, M. K., Foley, M. A., Suengas, A. G., & Raye, C. L. 1988 Phenomenal characteristics of memories for perceived and imagined autobiographical events. *Journal of Experimental Psychology : General*, **117**, 371-376.
- Larsen, S. F. 1998 What is it like to remember? On phenomenal qualities of memory. In C. P. Thompson et al. (Eds.), *Autobiographical memory : Theory and applied perspectives*. New Jersey : LEA. Pp.163-190.
- Linton, M. 1982 Transformations of memory in everyday life. In U. Neisser (Ed.), *Memory observed : Remembering in natural contexts*. San Francisco : W.H.Freeman. Pp.77-91.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Marsh, E. J., & Tversky, B. 2004 Spinning the stories of our lives. *Applied Cognitive Psychology*, **18**, 491-503.
- McAdams, D. P. 1982 Experiences of intimacy and power : Relationships between social motives and autobiographical memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 292-302.
- McAdams, D. P., & Aubin, E. de St. 1992 A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 1003-1015.
- McAdams, D. P., Aubin, E. de St., & Logan, R. L. 1993 Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging*, **8**, 221-230.
- McAdams, D. P., Diamond, A., Aubin, E. de St., & Mansfield, E. 1997 Stories of commitment : The psychological construction of generative lives. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 678-694.
- McAdams, D. P., Hart, H. M., & Maruna, S. 1998 The anatomy of generativity. In D. P. McAdams, & de St. Aubin (Eds.), *Generativity and adult development : How and why we care for the next generation*. Washington, DC : American Psychological Association. Pp.7-43.
- McLean, K. C. 2005 Late adolescent identity development : Narrative meaning making and memory telling. *Developmental Psychology*, **41**, 683-691.
- McLean, K. C., & Thorne, A. 2003 Late adolescents' self-defining memories about relationships. *Developmental Psychology*, **39**, 635-645.
- Moffitt, K. H., & Singer, J. A. 1994 Continuity in the life story : self-defining memories, affect, and approach/avoidance personal strivings. *Journal of Personality*, **62**, 21-43.
- Nigro, G., & Neisser, U. 1983 Point of view in personal memories. *Cognitive Psychology*, **15**, 467-482.
- Pillemer, D. B. 1998 *Momentous events, vivid memories*. Cambridge : Harvard University Press.
- Pillemer, D. B. 2001 Momentous events and the life story. *Review of General Psychology*, **5**, 123-134.
- Porter, S., & Birt, A. R. 2001 Is traumatic memory special? A comparison of traumatic memory characteristics with memory for other emotional life experiences. *Applied Cognitive Psychology*, **15**, S101-S117.
- Rubin, D. C. 1982 On the retention function for autobiographical memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **21**, 21-38.
- Rubin, D. C., Feldman, M. E., & Beckham, J. C. 2004 Reliving, emotions, and fragmentation in the autobiographical memories of veterans diagnosed with PTSD. *Applied Cognitive Psychology*, **18**, 17-35.
- Rubin, D. C., Schrauf, R. W., & Greenberg, D. L. 2003 Belief and recollection of autobiographical memories. *Memory & Cognition*, **31**, 887-901.
- Rubin, D. C., & Schulkind, M. D. 1997 Distribution of important and word-cued autobiographical memories in 20-

- 35-, and 70-year-old adults. *Psychology and Aging*, **12**, 524-535.
- 佐藤浩一 2000 思い出の中の教師—自伝的記憶の機能分析—群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **49**, 357-378.
- 佐藤浩一 2002 自伝的記憶の安定性 日本心理学会第66回大会発表論文集, 740.
- 下島裕美 2001 自伝的記憶の時間的体制化 風間書房
- Singer, J. A., & Blagov, P. 2004 The integrative function of narrative processing: Autobiographical memory, self-defining memories, and the life story of identity. In D. R. Beike, J. M. Lampinen, & D. A. Behrend (Eds.), *The self and memory*. New York, NY: Psychology Press. Pp.117-138.
- Singer, J. A., & Salovey, P. 1993 *The remembered self: Emotion and memory in personality*. New York, NY: The Free Press.
- 高橋雅延・清水寛之 2002 記憶特性質問紙による自伝的記憶の研究—日本語版記憶特性質問紙の作成—日本心理学会第66回大会発表論文集, 747.
- Talarico, J. M., & Rubin, D. C. 2003 Confidence, not consistency, characterizes flashbulb memories. *Psychological Science*, **14**, 455-461.
- Wagenaar, W. A. 1986 My memory: A study of autobiographical memory over six years. *Cognitive Psychology*, **18**, 225-252.
- Wheeler, M. A., Stuss, D. T., & Tulving, E. 1997 Toward a theory of episodic memory: The frontal lobes and autoegetic consciousness. *Psychological Bulletin*, **121**, 331-354.
- White, R. 2002 Memory for events after twenty years. *Applied Cognitive Psychology*, **16**, 603-612.
- Woike, B., Gershkovich, I., Piorkowski, R., & Polo, M. 1999 The role of motives in the content and structure of autobiographical memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 600-612.